英語教育

― コミュニケーション能力を育てる授業 ―

青　木　睦　子

目　次

1．はじめに
2．学習指導要領における国際理解とコミュニケーション能力の関係
3．学習者ストラテジーの過程
4．教室での教師の役割
5．授業の展開と指導力
6．教室における教師と学習者の相互関係
7．ペア及びグループ学習の有効性
8．結論

1．はじめに

この数年以来、コミュニケーション重視の言語教育理論がさまざまな形で紹介され、研究されている。それにつれて学校英語も変わりつつある。とは言ってもあまり大量の情報、多様な価値観があり過ぎて、現場に立つ教師達は、それに受け入れる事ができない事もある。このような状況のもとであっても、学習者１人１人が相手の意向を理解し、自己主張をし、さ

らに彼らが世界に羽ばたき、活躍できるような人物に我々教師が指導していくために、コミュニケーション重視の言語教育理論に基づいて指導していく事が、今必要不可欠な時と言えるのではないだろうか。

学校教育とは学習指導要領に基づいた小学校、中学校、高等学校で実施されている教育である。学校英語とは学習指導要領に基づいて中学校と高等学校で行う外国語（英語）を指している。この数十年間に学習指導の改訂を繰り返し、「教養的な価値」（人格形成）と「実用的な価値」（実践能力）をともに尊重しながら我々教師は責任を持って学習者の指導に日々携わっている。そして現在のように国際化が急速に進む中で、日本の学習指導要領を国際的な視点から見る必要が高まってきていると思う。平成元年の学習指導要領の外国語（英語）の教科の目標は 3 つから成り立っている。①外国語を理解し、外国語を表現する能力、②外国語で積極的にコミュニケーションを図ろうとする能力、③言語や文化に対する関心を高め、国際理解を深める能力を育成していく事が大きな指針となっている。これら 3 つの能力が基礎となって国際社会の中に生きるために必要な資質を持った学習者を育てていかなければならない。教室の中で限られた時間に教師と学習者の関係が常に風通しが良く、信頼関係を持って、4 技能の全てにおいて着実に英語力を付け、コミュニケーション能力を培い、これからの社会に生き抜くために自己主張ができると同時に相手の意見を明確に理解できるような人物に育成していくにつれて、日本人としての文化知識を身に付けていき、外国との文化の相違点を理解し、自然に国際理解が浸透していくのではないかと願っている。今回はコミュニケーション能力をできるだけ意識した教室英語に関して報告していきたいと思う。私は数十年英語教師として教壇に立って教授をしているが、1 日として十分満足できた授業は滅多にない。今日よりは明日へと希望を持って教授している。それも可能であれば楽しく、意欲を持たせる魅力のある授業をしようと思っている。今回の報告が、英語教授の上で一助になれば幸いである。

２．学習指導要領における国際理解とコミュニケーション能力の関係

昭和52年（1977年）告示（中学校）の学習指導要領の外国語（英語）の目標では「国際理解」に関わる箇所は次のように述べられている。

…言語に対する関心を深め、外国の人々の生活やものの見方などについて基礎的な理解を得させる。

まず「言語に対する関心を深め」は「日本語と外国語との言語構造や言語習慣の違い等を気付かせたり、改めて日本語を見直す機会を与えたりすることは、生徒の人間形成の上から大事な一面である。」次に「外国の人々の生活やものの見方について基礎的な理解を得させる」について、外国語科においては外国語の学習を通して、外国の事情について、いろいろと知るようになるのは当然のことである。もちろん外国の事情について知ることは、外国語科ばかりでなく、他教科の学習の中でもあり得ることであるが、外国語のことを外国の言葉を通して知るところに意義があるのである。このような外国語を通して外国の事情について知ることが直ちに国際理解とは言えないとしても、その基礎を培うことになるものである。

ここに示されている明確な特徴は「外国の事情」について、外国語（英語）を通して「知ること」に力点が置かれているということである。すなわち「知識」としての「国際理解」である。

一方、平成元年（1989年）告示（中学校）の学習指導要領の目標では、「国際理解」に関わる箇所は次のように述べられている。

…言語や文化に対する関心を深め国際理解の基礎を培う。

従前の学習指導要領の「言語に対する関心」に「言語や文化に対する関心」と「文化」が加えられ、「外国の人々の生活やものの見方等について」が「国際理解」に代わっていることが分かる。

「文化」が加わったことの意義は大きい。確かに、「言語」は「文化」と密接に結び付いており、両者は切り離すことはできない。従って「言語」だけでも十分であると考える立場もあり得るが、「文化」はその中に「言

語」を含みながらも、さらに包括的な概念と捉えるべきである。また「国際理解」に代わったことは、教育課程審議会の答申（昭和62年）にあるように「国際化の進展に対応し、国際社会の中に生きるために必要な資質を養う」という学習指導要領改訂の基本方針を積極的に受けたものであり、「国際理解」を通して「国際社会の中に生きる資質」を持った生徒をつくり出すことが外国語（英語）の学習指導の重要な目標の１つであることを明確にしたのである。

平成元年（1989年）告示学習指導要領の外国語（英語）科の目標は次の３つの要素から成り立っている。①外国語を理解し外国語で表現する能力、②外国語で積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てること、③言語や文化に対する関心を高め、国際理解を深めること。

①は外国語によるコミュニケーション能力の育成を図ることを意味する。コミュニケーションとは、話し手と聞き手、書き手と読み手の意思の疎通ができることである。「外国語を理解し」とは外国語を聞いて理解したり読んで理解することを意味する。これは、一見、受け身的な行為であるが、実は能動的、創造的な行為である。外国語を読むとは表面的な意味を理解することに留まるものでなく、読み手の解釈、意見等を加えていくものである。また外国語を聞くとは、推量、予想などを行って内容の理解の正確さをできるだけ期し、要点や概要について把握し、自分の意見をまとめる作業を含むものである。

また、「外国語で表現する」とは話したり、書いたりして表現することを意味する。自分の考えなどを正しい表現で述べるばかりでなく、目的に応じて明確に述べ、書き表すことである。以上の４技能はそれぞれ独立して用いられる場合もあるが、相互に関連し合って用いられることも多いので相互に関連付けて調和の取れた指導が大切である。

②では「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度」を目標の１つに取り上げている。コミュニケーション能力はこれを行おうとする積極

的な意志や態度によって向上する。コミュニケーション能力は、積極的に自分の考えなどを伝え相手の意思等を明確に理解しようとする態度と一緒に養成されていくものである。

③では「言語や文化に対する関心を高める」ことによって「国際理解を深める」ことが目標の１つであることが示されている。「言語に対する関心」とは日本語と学習対象の外国語の音韻、文法、意味、談話構造等に対する関心であり、その結果として日本語や外国語のさまざまな類似点や相違点の理解が深まる。言葉の構造や表現は民族特有の文化に根差したものである。そこで日本及び外国の文化に対する理解も深まることになる。国際理解は日本人と同じく外国人も独特の文化を持ちながら、人間同士として共通の価値観も併せて持っていることを認識することである。（１）

以上のように昭和62年教育課程審議会の外国語（英語）の改善の基本方針を受けて、「外国語（英語）でコミュニケーションする能力を養うこと」に言い換えている。そこで外国語（英語）科の目標が総合的に達成することで、「国際理解」から「コミュニケーション能力」へ相互的に動き出すものである。浅野（1989）は「国際理解」を英語にすれば、普通、“international understanding”となるが、“intercultural communication and understanding”としてはどうかと言っているが、まさに学習指導要領の目標の「国際理解」の意味を適切に捕らえていると言える。浅野はさらに次のように述べている。

学習指導要領そのものに「コミュニケーション」という用語が使われているので、「理解」にこの概念を含めて考えておくことが必要であろう。そもそも「国際理解」という時の「理解」は「相互理解」の意味に解する必要があるわけで、そのために「相互伝達」の意を含むコミュニケーションが不可欠となろう。そこまで考えるのは拡大解釈になるかもしれないが、目標として意識しておくことが大切である。

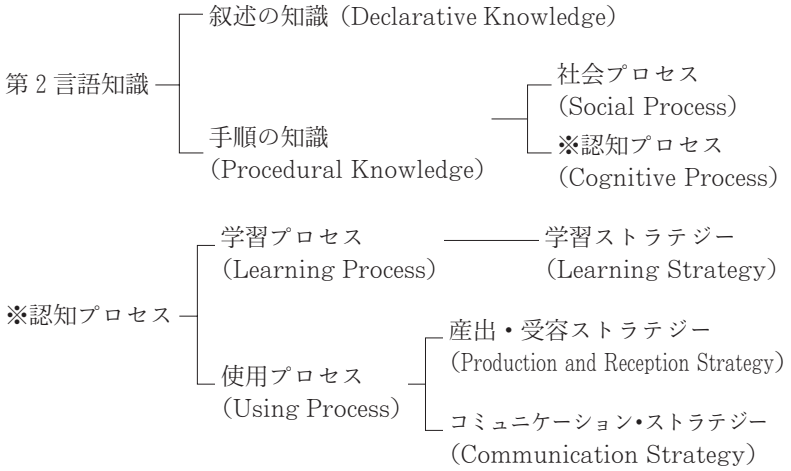
以上のように浅野の説は拡大解釈であると断言しても言い過ぎであると

は思わない。と言うのは、英語という言語を使って相互理解へたどり着くために相互伝達の意を含む「コミュニケーションの力」がなければ成立することができない。それ故この2つの「国際理解」と「コミュニケーション能力」は表裏一体の関係にあり、切っても切り離す事ができないからである。従って一般的に、「コミュニケーション能力」は「外国語（英語）を理解し、外国語（英語）で表現する基礎的な能力」を指すと解釈されているが、「コミュニケーション能力」は「国際理解の基礎」も含む概念と考える方が適切となる。いわばコミュニケーション能力とは、・英語を理解し、英語で表現する能力、・英語で積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度、・国際理解（の基礎）（2）、を含めているものと解釈するのが妥当であると思う。

3．学習者ストラテジーの過程

フェイクとキャスパー（Faerch & Kasper, 1983 b）によれば、第2外国語の学習者は2種の知識を持っているという。すなわち叙述の知識（Declarative Knowledge）と手順の知識（Procedural Knowledge）である。叙述の知識とは、内在化して自分のものにした第2外国語のルールと記憶された言語のチャンク（かたまり）とから成る知識である。他方、手順の知識とは、学習者が第2外国語の「習得」や「使用」のために、第2外国語データを処理する際に用いるストラテジーや手順などの知識である。この手順の知識は、さらに社会プロセス（Social Process）と認知プロセス（Congnitive Process）に分かれる。社会プロセスは相互交渉の機会を処理する際に、学習者が使用するさまざまな行動的ストラテジーから成っている。この概略を図示すれば以下のようになる。また認知プロセスは、第2外国語でコミュニケーションするために、他の知識と結び付けて第2外国語を使用すること、あるいは、新しい第2外国語の知識を内在

化したり自動化したりすること等を含むさまざまな精神的プロセスから成っている。つまり、それらは第２外国語の学習のプロセス（Learning Process）と、使用のプロセス（Using Process）である。ここで学習プロセスは、学習者のインプットや現在の知識を用いて新しい第２外国語のルールを蓄積し、自動化する方法である。また使用プロセスは、産出・受容ストラテジー（Production / Reception Strategies）と、コミュニケーション・ストラテジーに分かれる。前者はタローン（Tarone, 1981）によって定義されたもので、現在ある第２外国語の知識を有効にしかも最小限の努力で使用しようとするものである。後者は話し手が意図した仕方で最初のコミュニケーションの目標を伝達できない時に生じるもので、そのためにはその目標を切り詰めたり、それを表現するために他の代用的手段に切り替えざるを得ない。従って、コミュニケーション・ストラテジーは、文生成に失則した結果生じる伝達上の方便である。



以上の全てを総称して、学習者のストラテジーと言う。（３）

例えば、平成元年３月15日に告示された中学校学習指導要領・高等学校

学習指導要領改善方針を取り上げてみよう。

「中学校及び高等学校を通じて、国際化の進展に対応し、国際社会の中に生きるために必要な資質を養うという観点から、特にコミュニケーション能力の育成や国際理解の基礎を培う事を重視する…途中省略。外国語の習得に対する生徒の積極的な態度を養い、外国語の実践的な能力を身に付けさせるとともに、外国についての関心と理解を高めるよう配慮する」…以下省略。(4)

以前の学習指導要領にはなかった“コミュニケーション能力”、“積極的な態度”は一際目立ち、重要な意味を持っている。この能力と態度を一体化し育成していく事が学習指導要領が求めていることであり、我々教師もそれらに立ち向かって指導にいそしんでいる。ここで言っている積極的な態度は以前から使われていた学習態度と重ね合う部分もあると思う。言語習得研究で忘れてはならないのはSavignon（1983）のコミュニケーション能力の4つの構成要素である。それらは文法的能力（Grammatical Competence）、社会言語的能力（Sociolinguistic Competence）、談話的能力（Discourse Competence）、方略的能力（Strategic Competence）がある。いわば上記で申し上げた認知プロセスの学習ストラテジーというのはSavignon（1983）の談話的能力に相通じるものがあると思う。この能力は平成元年（1989）年学習指導要領の言語活動の指導事項の「まとまりのある文章の概要や要点を聞き取ること」「話そうとする内容を整理して、大事なことを落とさないように話すこと」「まとまりのある文章の概要や要点を読み取ること」「聞いた内容について、その概要や要点を書くこと」「読んだ内容について、その概要や要点を書くこと」等に関する能力と言える。この能力は話す力、聞く力、読む力、その上書く力をも対応していき、学習者が第2外国語を習得した姿と言える。一方「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度」で学習指導要領で言っているように、学習者はできるだけ、応答するために悪戦苦闘

して、不完全なものであっても自分の持っている言語知識を振り絞って自分の考えを伝達しようと努める。これが認知プロセスのコミュニケーション・ストラテジー（Communication Strategies）とSavignonの方略的能力（Strategic Competence）と同義であると言える。

Savignonによれば方略的能力は、例えば、次のような状況を克服できる能力なのである。

(a) 適切な語彙が思い付かなかったらどうするか。

(b) 自分が考えをまとめるために言い淀んでいる間も相手とのコミュニケーションを断ち切らないようにするにはどうするか。

(c) 相手が使った単語や表現が理解できない時にそのことをどう伝えるか。

(d) 自分が伝えたいことが相手に誤解されていることが分かったらどうするか。

(e) 相手が速く話し過ぎていて理解できない時はどうするか。

このような状況に対応するための方略をTarone（1983）は次のように列挙している。

(a) 言い換え（paraphrase）

近似表現（approximation）、造語（coinage）、回りくどい言い方（circumlocation）

(b) 借用（borrowing）

逐語翻訳（literal translation）、言語転換（language switch）、助けを求めること（appeal for assistance）、身振り（mime）

(c) 回避行動（avoidance）

話題回避（topic avoidance）、伝達放棄（message abandonment）

（５）

我々教師は絶えず活気があり、相互伝達のある授業を試みようとしている。そのために授業に入る以前に学習者１人１人の実態を把握して教壇に立っていると思う。その実態とは、学習者の心理、個々の実力、性格等を

含む。我々は学習者から完璧な答えが返ってくるとは予想していない。できるだけ学習者に考える時間を与え、個々の彼ららしい答えが返ってくることを求めるべきであると思う。学習者が戸惑った時には提示を繰り返し、それまでに学習した言語的、文化的事項に新しい事項を付け加えて、より拡大された内容を加えてアプローチするべきであると思う。そしてそれらが相応しい応答であれば、本人に達成感、満足感、成功感を実感させ、自然に積極的な態度が生まれてくると信じる。そして徐々に学習者の応答が以前学習された語彙、文章等が組み立て、自分の意志をもはっきり伝達されていくのである。授業とは知識、法則、決まり事を伝授していくものでは決してない。英語をできるだけ使わせ、授業内容の分かるものでなければ１時限に求める授業の意義は生まれてこない。いかに教師の采配、いかに授業が生きたものになるか、死んだものになるかといずれかになるものである。

４．教室での教師の役割

社会変動に伴って教育界、学習指導要領等が改訂されて、英語教育に対する取り組み方や、概念も変わってくるのは当然である。それに合わせて教師も教育に対する姿勢も変わっていくものである。以前の授業体制は教師主導型の学級単位による一斉授業で、短時間に教授し、教室内で競争心を植え付け、一面的に学習を促進されていたと思う。学習指導要領の改訂を積み重ねていくにつれて、学習者の発信型、即ちlearner-centered approachの形になり、学習者の自主的な活動、発表を生む学習方法へと進んできている。

誤答文責の提唱者であるS. P. Corderがintakeという言葉を遣っている。教師がいくらinputを学習者に与えたとしても、学習者がそれを主体的に取り入れ（intake）なければ学習は成立しないというのである。教師

がいくら語っても、「教えること・学ぶこと」が成り立つには、学習者側に変容が起こらなければ、教師は語っただけ、学習者は聞くだけである。外国語学習は学習者にとって、全人的な経験である。学習者の認知面と共に情意的側面（affective domain）を軽視することはできない。生徒同士の相互関係、また到達面、結果だけでなくプロセスも重視する必要がある。（6）

情意的側面が言語学習を活発にさせる一因ではないかと唱えているのは「情意フィルター」で名高いKrashen & Terrell（1983）である。

彼らは言語習得における「情意フィルター」の重要性を指摘している。例えば、・学習者の動機が低い時、・過度に緊張している時、・学習に不安を感じている時、・学習者が心理的に不安定な状態の時にこの「情意フィルター」は高くなり、言語習得が妨げられると考えられる。

英語学習に取り組んでいる学習者は英語の知識や能力が不十分である。そしてコミュニケーションを行う時に自分の持つわずかの知識や能力で意思の伝達を図ることは並大抵のことではない。そこで多くの学習者は抵抗をし「情意フィルター」は高くなり、不安と緊張からコミュニケーションは消極的なものになる。そこで教師はできるだけ、コミュニケーション能力を意識して授業をするためには、学習者に緊張、不安、恥ずかしさを克服させていかなければならない。そうすれば自然に積極的なコミュニケーションが遂行できると思う。先生が絶えず、学習者の相談役であり「カウンセラー」となって学習者の意識、態度を的確に診断し、学習者からの応答を待つのである。その応答に的が外れているものであれば学習者が最近学習した語彙文章をも配列し直すように仕向けるのに、再度提示する事も必要である。場合によってその時社会文化的状況のもとで１つの機能を表した言語教材を全く違った状況で質問をした時に言葉の幅の広さを理解させ、自分の応答が伝達できた達成感、喜びを学習者に味わわせることも大切である。たとえ単純な内容でもコミュニケーションを利用して、本物の

情報の授受が生まれるように心掛ける事が何よりも大切なことである。そのような授業が日々重ねていくにつれて、学習者に「やる気」が引き出されていくのではないだろうか。E. Allen（1978）は学習者にやる気を持たせるには、今の学習者の心理、学習の特徴を教師が的確に捉える、そうすれば学習者はすぐに満足感を味わうことができ、そして学習者と仲間、いや教師と学習者のやり取りが楽しいものになっていくのである。教師側においては、絶えず教え込むのではなく、学ばせるという意識を持つ、そしてはっきりした教科単元の目標設定を持ち、学習者に興味をそそる例題、トピックスを取り入れ、学習者が理解ができ、かつ分かる授業を行うべきである。そしてある時には、教師は傍観者として授業の流れを見て、場合によっては適切なアドバイスを与え、授業の展開の潤滑油になるべきであろう。そうする事により、知的理解の質が上がり、その学習者の主体性、活性化も上がってくるのである。いわば教師と学習者、学習者同士の信頼関係が芽生え、温かい人間関係の中で理想的な授業体制が生まれてくると思う。

５．授業の展開と指導力

授業の展開とは教案を立て設計した授業を実践していくことである。同じように設計されたものであっても学習者の授業への引き付ける力というのは指導する教師によって異なってくる。授業中発問、指示、説明、応答が適材適所に実施されているのであればそれは、あまりに無味乾燥な授業ではないだろうか。特にコミュニケーション能力の養成を目指す授業であれば、学習者の豊富な背景的知識を認識しておくべきでしょう。彼らの膨大な知識とは学習知識はもちろんのこと、マスメディア関係の知識、趣味、特技等を含むのである。教師は授業に入る前にそのような個人情報やニュース等を踏まえて授業に取り組む事で、教師は学習者に前向きのコミュニケー

ションに取り組むように促す事が可能になり、授業がスムーズに進み、学習者が不十分な英語力であっても、意見、考え、問題意識、判断基準等を示してくれる。教師は授業展開の中で学習者個人の認知、情意面にも目を向けていくことになり、教師と学習者の距離感覚が狭くなり、一層フレンドリーな空気が漂うようになる。学習者にfluercyを養う言語活動を行われ、彼らに自信を与えながら時にはaccuracyを高める言語活動を与え、バランスの取れた指導が大切である。accuracyばかり求めると学習者が消極的になることもあるので、均衡が大切であると思う。そして授業中に学習者の活動が個別評価する時間でもある。学習者の積極的、かつ協力的に活動に取り組み、学習者から活発な発話を引き出し、どの程度理解されているか、あるいは理解できていない部分をも評価できる。それが次の授業を完成させていくための知識となり、最初の授業が次回へ、学習者にとって理解度を深め、分かる授業になっていくのである。教師が教壇に立って、学習者に何かを教えるという事はただ単に知識や教授技術だけのものではなく、教師と学習者の人間的触れ合いという全人格的なものであるべきであると思う。教師はあらゆる事に関心を示しあらゆる情報をキャッチして授業中の途中経過の時とか、学習者が退屈し始めた時にそれをねたにして、学習者に引き付けるものを持っている事も授業の展開の時間を効率良く遂行させ、授業の成否を決定させ、それが大きく左右する場合もある。

６．教室における教師と学習者の相互関係

マレシャーの外国語クラスの中級２年生を対象にしたコミュニケーション授業（Excerpt 6. 1）を参考にして、相互関係を解明したいと思う。教師、学習者共に同じ母国語を話し授業中は英語を使って展開することを前提とする。英語の教科書に出てきているadvertisementの語彙を学習する事がテーマである。

授業に入る前に友達や親戚にclearance saleで買い物したいという気持ちを伝える手紙を書く宿題が与えられている。

Academic task structuresとSocial participation structuresがこの学習において同時に操作できるように指導する事が条件である。授業の連続性は学習者の応答が不正解であろうと無視をしないで、また発端に戻り、懇切、丁寧に指導していく方法である。例えばWhat is this advertisement about? PeersakとMiloの答えは正しいとは言えない。4に戻りWhat is the word that used there? 教師は次の質問を切り出す前に肯定的な応答を繰り返す。Suchadaがclearance saleの応答をしてturn 5に会話が向けられWhat word does it come from?の質問が始まり、教師と生徒の相互関係の源が自然に芽生えてくる。教師は正しい応答を聞き出すため、教師は話の発端に戻り不正解な応答を評価する。excerptを連続していくにつれてAcademic task structureとSocial participation structureが徐々に身に付いていく。

12－24にかけて、Academic task structureは、まず、店頭の位置を認め、さらにその状況における目標を確認する。最後の目標について繰り返し、首尾一貫したpatternが続く。

13でPeersakがGround floorと答え、教師はそれに対して肯定的な評価を与えその状況の話題を確認し合う。何を購入するか、さらに詳しくどこで作られたか、カメラの価格、安売りの価格へと導入していく。Academic task structureとSocial participation structureが共に維持し連続化されていく。

24－32。教師は異なった品目を選択する。その状況を尋ね、その状況における品目を確認する。会話が進むにつれて、教師の使用する言語の唯一の変化は正しい応答の肯定的な評価を引き出し、それを繰り返す事なく次の話題へ進む。25. First floorと応答するとすぐに、What can you buy there?へ進んでいる。さらに詳細に質問していく。生徒の応答の繰り返し

よりもまとめようとしていく。いわばAcademic task structure（その品目に関わる状況、品目の特徴）等を認め始め応答していく。教師は生徒の肯定的な評価を引き出し始める。25の中でMiloが直接stainless steel kettlesと答え、その後すぐに教師がHow many styles of kettles?へと進む30と34ではMiloは応答を繰り返しているが、それはまとめとして進行させている。

34に入り、教師はSuchadaにif you want to buy a rattan picnic basket, which department will you go to?と尋ね、話題を変える。

35でSuchada：First floor. と答える。教師が要求しているものはWhich department...?であってWhich floorを尋ねているわけではない。このような状態になると教師は否定的な評価を与え、不正解を無視し他の糸口（導入方法）を与える。Which department?と尋ねられFlower departmentと答え、教師は肯定的に答え、同意する。教師はまたWhere does a rattan picnic basket come from?に戻る。教師がもとの話に戻るという事は、生徒がある情報の枠にはめ込まれた意味以上にAcademic task structureの中に加わり、自分の置かれている状況を正確に認め応答しようと努めている。時にはSuchadaがAcademic task structureを無視した場合には、教師は手早く生徒が間違いを訂正しようとする応答に向きを変え、Academic task structureを再び作り上げる必要がある。教師はcommunicationのpatternを指導すると同時にその会話の流れ全体を把握している。それによってpreformulationとreformulationの相互やり取りを繰り返す事になってcommunicationが成立している。

このexcerptの質問にあるWhat is this advertisement about?の“advertisement”の語彙の意味を学習するためにWhat is this advertisement about?の質問に固定化し、生徒がいかに答えられるか教師が指示を与えている。生徒が正解を与えない場合は4の中でWhat is the word that is used there?というように単純で分かりやすい言葉を

使っての質問をするのである。このような戦略でSuchadaは正しく応答する事ができる。教師は学習されていない語彙が出てきた場合、このexcerptの中で８、42で２回分かりやすい言葉で繰り返し、質問している。８の中で、教師はclearance saleという語彙はまだ学習していないため、改めてWhat word does it come from?と尋ねるとPeersakはclearと答えSuchadaは“To clear up”と応答する。また42の中でWhat is a flask holder?と尋ねflaskとholderを分けて確認しWhat about holder?といった具合に質問している。このように学習されていない語彙に学習者が出くわした場合、教師は、その意味をどのようにして言語から引き出していくかは教師の持つ知識、判断力が、大きな力になる。授業展開を効果的、興味深いものにしていくと思う。この授業の進め方は場合によっては単純で当たり前のように思われるが、・学習者がいかに参加し応答するか、・教師の質問内容がどの程度理解しているのか、・学習者の積極性が徐々に生まれてきているか、・さらに学習者の応答が以前学習された文章を組み立て、自分の意志をはっきり伝達できているか、等を教師が絶えず確認しながら次の質問、話題へ導入していく。授業とは知識を伝えるだけではなく、英語をできるだけ使わせ授業内容の分かるものでなければ心の通った授業とは決して言えない。

さらに付け加えたい事は教師は新学期始業開始と同時に、次のような事を実行して教壇に立ってもらいたいと思う。それは低学年の学習者に対して、特に彼ら達の特技、趣味、他の教科の関心度、友達関係、クラブ活動等をできるだけ把握しておく。そうする事によりその日のkey pointに入る際に、それらの事を授業内容に取り入れ指導していくのが望ましいと思う。学習者は打ち解けた内容には耳を傾け、集中して聞く、それが原因で自然に和やかな雰囲気のクラスルームができ上がる。授業終了後、学習者はkey pointをたとえ忘れてしまったとしても、その時の話題が記憶に残るものである。その記憶の糸をたぐっていくと、key pointを思い出すも

のである。くだらない話であったとしても１時間の授業に占める割合は大きいもので決して無駄な時間ではない。教師と学習者の関係は授業が進むにつれて、心が通い合い、信頼関係が芽生えてくる。時間の経過と同時に学習意欲を高め、効果的な学習が生まれてくると確信するのである。

Excerpt 6. 1

1. T：What is this advertisement about?
2. Peersak：Radio...sale.
3. Milo：Cheap sale...
4. T：What is the word that is used there?
5. Suchada：Clearance sale.
6. T：Clearance sale. OK, in the first place, do you know the meaning of “clearance sale”?
7. Suchada：Clearance sale.
8. T：Clearance sale. Let's look at the word “clearance”. What word does it come from?
9. Peersak：Clear.
10. T：Therefore, “clearance” sale will mean what?
11. Suchada：To clear up.
12. T：To clear up, that's right. To clear up all the goods in the store. OK, let's look at the items which are for sale. Where is the photographic department? Peersak, look at the advertisement and tell me, where is the photographic department?
13. Peersak：Ground floor.
14. T：Yes, on the ground floor. Now, if you go to the photographic department, what can you get there?
15. Peersak：Camera.

16. T : A camera. Can you be more specific? What kind of camera?
17. Peersak : A Kodak...Instamatic 76X camera.
18. T : OK, a Kodac instamatic camera. What is the usual price of the camera?
19. Peersak : Twenty-seven and forty cents.
20. T : Twenty-seven dollars, forty cents. And what is its price after the sale?
21. Peersak : Twenty-three dollars, seventy-five cents.
22. T : Twenty-three dollars, seventy-five cents. Now, if you buy that camera what free gift will you get?
23. Peersak : ...Ball.
24. T : A ball. Now, let's move on to some other department in the store. Milo, where is the housewares department?
25. Milo : First floor.
26. T : What can you buy there?
27. Milo : Stainless steel kettles.
28. T : How many sizes of kettles?
29. Milo : Five.
30. T : OK, these stainless steel kettles come in five sizes. And what is the special feature of this kettle?
31. Milo : Imported.
32. T : What other special features?
33. Milo : Movable handle.
34. T : Yes, they have movable handles in addition to being stainless steel. OK, now, Suchada, if you want to buy a rattan picnic basket, which department will you go to?
35. Suchada : First floor.

36. T：Which department?
37. Suchada：Flower department.
38. T：Yes, flower department. Where does this picnic basket come from?
39. Suchada：China.
40. T：What is its special feature?
41. Suchada：Complete with tray and two flask holders.
42. T：Yes, and what is a flask holder? You know what a flask is, right? What about holder? It comes from the word “hold”. It holds the flask. OK, all right...（7）

7．ペア及びグループ学習の有効性

授業形式には、一斉授業形態と個別学習形態があり、後者の方にペアまたはグループ学習が入る。一斉授業が教師主導型、個別学習は生徒主導型と言える。ペア及びグループ学習が言語学習に有効であるという報告が多く出されている。

例えば、共同で行う活動では、理解の早い生徒が自分の言葉で、あまり関心を示さない学習者に説明することの効果が期待できるという指摘（Slavin, 1987）や学習者に社会性を与え、人間的成長を助けるという指摘（Kohonen, 1992）は、共同授業のメリットが言語学習の範囲に留まらないことを示すものである。さらにLong（1985, 1989）はペアやグループの活動とタスクの関係を次の表で表している。

one-way task （一方的な情報伝達活動）	two-way task （相互の情報伝達活動）
open task （答えの決まっていない活動） divergent task （debateのようにある立場に立って自由に議論する発散的活動） unplanned task （準備しない活動）	closed task （答えの決まっている活動） convergent task （問題解決型活動のように目標に向かって解決策の設定されている収束的活動） planned task （準備する活動）

右側のタスクは左側のタスクに比べ、発話量が多く意味交渉の機会が増すのでコミュニケーション活動に有効であると述べている。ちなみに２人の生徒がペアになり、片方が道路地図を持ち、もう１人が建物を示している地図を持つとしよう。建物を示してある地図を持つ生徒が道路地図を持つ生徒に特定の場所への行き方を説明して地図に記入させれば、インフォメーション・ギャップは記入者にのみ存在する。そこでこの活動はone-way taskである。しかし双方の地図に別の建物が記入してあり、それぞれが質問し合って地図を完成すれば、この活動はtwo-way taskである。

以上のように有効性は理解できるが、実際に教室内で実践する時には、ペア活動を退屈させないために、まず学習者に目的をはっきり伝え、制限時間を設けるのも効果的である。ペア活動をしている間は、教師は必ず机間巡視をし、時には学習者がより積極的活動に取り組めるような適切な援助を与えることも必要である。場合によって、能力の異なりが大きく、ペア活動は能率的に機能しない場合もある。教師は学習者の特質をよく見極めて、慎重に実践すべきである。ペア及びグループ活動授業は一斉授業と異なり、学習者が主人公になって授業に参加し、発表する場が多くなる。たとえ大勢の前で発表の不得意の学習者も、普段の自分をさらけ出し、うまくコミュニケーションを取ろうと心掛ける。そして教科書の中に出てきた会話を思い切って発話し、主体性が生まれ、自発的な発想も大いに伸ばすチャンスではないかと思う。授業時間の45分とか50分間は学習者の立場

になって考えると、とても長い、時には辛い時間になりがちである。そういう時に一斉授業の中にペアとかグループ授業を取り入れて変化を持たせ、学習者に１時間の授業を効果的なものにすべきである。（８）

８．結論

長い間、英語教育論、改革論が絶えず叫ばれてきている。特に松本茂の提案が教育改革の理念の根幹を述べているのではないだろうか。－教師が生徒に知識を授けるといった固定的な関係を打破し、自立した学習者を育て、クラスを学びの共同体として捉えて人間関係を大事にし、教科書の内容を実生活にいかに拡張させて学びに現実感を持たせるかといった事を主眼として教育改革を進める－（９）。この改革論は短いが的を射っていた論と言える。学習指導要領が求めている外国語による「コミュニケーション能力の育成を図る」とは一見受動的な行為であるが、実は能動的、創造的な行為である。読む、書く、話す、聞くの４つの技能はそれぞれ独立して用いられる場面もあるが、相互に関連し合って用いられることも多いので相互に関連付けて調和の取れた指導である。また「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度」とは、積極的に自分の考えなどを伝え相手の意思などを明確に理解しようとする態度である。最後の目標として「国際理解を深める」とは日本人と同じく外国人も独特の文化を持ちながら、人間同士として共通の価値観を併せている事の認識である。以上の３つの目標を踏まえて、教師は教壇に立ち、教える立場の教師、学ぶ側の学習者、それに教育内容の３つの要素が土台となって授業が展開されていく。毎時間目標達成する事は不可能な場合も多々ある。その時はやはり長期的な構想に取り組む事も大切になる。そして心を開いて語り合うという雰囲気が教室内に確立されているかが前提である。それには抵抗がなく、教師は長期的な計画によってクラスを１つの共同体として育成する努力を続けねば

ならないでしょう。その前提には、教え込もうとする姿勢を自らチェックし、「どれだけ学んだか」ではなく、「どんなふうに学んでいるか」をより重視することが必要です（Stevick, 1976）。教室という狭い世界の中でE. Allen（1978）が提言しているように学習者（生徒）に「やる気」を持たせるためには、まず教師が学習者の特徴を捉えることが大切であると言っている。教師は教壇に立つ前に学習者とのコミュニケーションを取り、情報をキャッチし、授業が円滑に進むために絶えずアンテナを張って学習者と融合していくように努めたいものである。さらに追け加えておきたいことは平成11年学習指導要領の外国語科の目標である。“外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、情報や相手の意向などを理解したり自分の考えなどを表現したりする実践的コミュニケーションを養う。”（10）とある。この目標は異文化理解と積極的に話し合おうとする態度の相互関係が土台となって実践的なコミュニケーションが誕生していくということであろう。それには学習者に実際に情報の受け手や送り手となってコミュニケーションのやりとりの活動が必要になる。授業中に言語の使用場面を多く作り実践させていくべきである。その実践力になるものは、聞く、話す、読む、書くといった 4 つの技術も複合的に実践コミュニケーションに関わりを持ち、情報伝達を明確なものにしていく。いわば実践コミュニケーションは単独で作業するのではなく、それらの 4 つの技術、本人の経験、知識が支えとなってコミュニケーションの力が一層効果を上げていくのである。このような事を念頭において授業に取り組んでいくべきであると思う。新しいことに挑戦する時には、誰でもためらうものである。勇気を持って一歩前進しなければ何事も始まらないと思う。明日からではなく、今日からでも自分なりに工夫してコミュニケーション能力を促進する方法を編み出していきたいと思う。

参考文献

1．羽鳥博愛「学習者中心の英語教育」大修館書店
2．Jack C. Richards “Reflective Teaching in Second Language Classrooms” Cambridge University Press
3．Karen E. Johnson “Understanding Communication in Second Language Education” Cambridge University Press
4．小池生夫「第 2 言語習得研究の現在」大修館書店
5．M. フィノキアーロ「言語活動中心の英語教授法」大修館書店
6．萬戸克憲「国際化と英語科教育」大修館書店
7．大下邦幸「コミュニケーション能力を高める英語授業」東京書籍
8．大下邦幸「学習者を生かすコミュニケーション活動」全国高等専門学校教育研究協議研究論集　第12号
9．小山内洸「英語科授業論の基礎」リーベル出版
10. ロッド・エリス「第 2 言語習得序説」研究社
11. 高梨庸雄「英語コミュニケーションの指導」研究社出版
12. 高梨庸雄「英語教育学概論」金星堂
13. William Littlewood “Communicative Language Teaching” Cambridge University Press
14. 米山朝二「新しい英語科教育法」大修館書店

引用文献

1．平成元年高等学校学習指導要領解説　外国語編・英語編　P.11-12　文部省
2．和田稔「日本における英語教育の研究」　P.116-121　桐原書店
3．水野光晴「外国語習得　その学び方100の質問」P.134-135　研究社出版
4．平成元年高等学校学習指導要領解説　外国語編・英語編　P.6　文部

省
5．小池生夫「第２言語習得研究に基づく最新の英語教育」　P.219-220　大修館書店
6．諏訪部真他「英語の授業実践」　P.314　大修館書店
7．北海道武蔵女子短期大学紀要第30号　P.149-154
8．北海道武蔵女子短期大学紀要第37号　P.12-14
9．英語教育　2006　５月号　P.15　大修館
10．平成11年高等学校学習指導要領解説　外国語編・英語編　P.10　文部省